

スペイン語圏を知る本 (その33)

ラファエル・ラペサ著

『スペイン語の歴史』

昭和堂、2004年

評者 坂東省次

古典的あるいは歴史的名著の翻訳は貴重である。今年になって相次いで出版されたアメリカ・カストロ著『セルバンテスの思想』（法政大学出版局、2004）とラファエル・ラペサ著『スペイン語の歴史』を前にすると、そんな思いを新たにす。

日本語で出版されたスペイン語の歴史といえば、これまでサムエル・ヒリ・ガヤの『スペイン語の歴史』（南雲堂、1983）があったが、これは真の意味でのスペイン語の歴史ではない。また、『スペインの言語』（同朋舎出版、1996）はその趣を備えてはいるが、やはりスペイン語の歴史書ではない。その意味で今回刊行の運びとなった『スペイン語の歴史』は、日本の読者にとってまさに待望の書である。

著者ラペサについては、今年、出版予定のスペイン語学に関する本のなかで、筆者は次のように説明している。「Lapesa（ラペサ）、Rafael（1908－2001）：メネンデス・ピダルとアメリカ・カストロを師と仰ぎ、歴史研究所でスペイン文献学を学ぶ。20世紀最後で最大のスペイン文献学者と言われ、スペイン語圏の言語学の世界にもっとも通暁していた人であった。スペイン文献学発展への多大な貢献のなかでも最大のものは、1935年出版後版を重ね、今やスペイン語研究者必読の書となった『スペイン語の歴史』（Historia de la lengua española）の刊行である。それは単なるスペイン語史ではなく、メネンデス・ピダルから受け継いだ方法論に基いて書かれた画期的な言語社会史である。」

1935年の初版の「序文」で著者ラペサはこう言っている。「本書は、我々の文化の発展を反映するスペイン語の、その構成と進展に関する歴史的展望を簡略な形で提示することを願って執筆された。

私はこの思いを、スペインの国語に関する問題に興味をもっているすべての人々にも、そしてまた専門家でない人たちにも届けたいと思っている。」

仮にスペイン語の歴史が言語学のフィールドだけで書かれれば、専門家でない人たちには理解しがたいであろう。本書は言語史であるより言語社会史であり、スペイン語がその誕生から社会の発展といかに関わってきたかを分かりやすく説明してくれる。その意味で、一般読者にも近づき易い専門書ということになる。

本書は全17章からなる。1) 先ローマ期の諸言語、2) イスパニアのラテン語、3) 俗ラテン語とイスパニアのラテン語の特殊性、4) ラテン語からロマンス語への移行 西ゴート時代、5) アラビア人と、スペイン語のなかのアラビア語要素、6) イスパニア語の原初ロマンス語、7) イベリア半島の原初方言 カスティリア語の伸長、8) 古スペイン語 遍歴芸人と聖職者 散文の誕生、9) 賢王アルフォンソの時代と14世紀、10) 中世スペイン語から古典期スペイン語への移行、11) 黄金世紀のスペイン語 スペイン帝国の拡張 古典主義、12) 黄金世紀のスペイン語 バロック文学、13) 黄金世紀のスペイン語 全般的な言語変化、14) 近代スペイン語、15) 現代スペイン語の広がり多様性、16) ユダヤ人のスペイン語、17) アメリカ・スペイン語。

本書はスペイン語の通史であるがその広がりには単にイベリア半島にとどまらず、新大陸アメリカやフィリピンにまで及んでいる。しかし、同時に本書はスペイン語圏の言語史といってもよく、スペインに誕生した言語あるいは方言としてバスク語、カタルーニャ語、ガリシア語、アストゥリアス・レオン方言、アラゴン語、アンダルシア語、エストレマドゥラ語、ムルシア語、カナリア語をとり挙げており、さらにはアメリカ・スペイン語とともに先住民諸語への言及もある。

本書は、世界に広がるスペイン語の世界の全体像を見事なまでに明らかにしてくれよう。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）